



ブラジル連邦共和国

República Federativa do Brasil

ラテンアメリカ諸国日系人 外務省研修 50 周年について

外務省研修生ブラジルOB会

外務省のラテンアメリカ 日系研修生招聘事業

日本国外務省は、ラテンアメリカ（中南米）の日系指導者に国の社会・経済・文化を紹介するために1965年に中南米諸国日系研修制度を創設しました。この制度は継続的に実施されてきて、本年は50周年を迎えましたが、その間ブラジルから様々な職業の日系人約200名が招聘されました。

研修内容は年度によって異なりますが、概して(1)国の歴史、社会、文化、政治及び経済についての各分野専門家による講演、(2)外務省関係者訪問、(3)皇室訪問、(4)国会議事堂見学、(5)企業見学、(6)視察旅行等が中心적입니다。その実施にラテンアメリカ協会が積極的に協力してくださっていることに謝意を表する次第です。このプログラムが研修生の個人的、職業的成長及びブラジルの社会的発展に大きな影響を与えることは疑いの余地はありませんが、その上、日本と中南米各国そして中南米の国々の間で文化的社会的交流を促進してきたことも指摘すべきであります。招聘事業は、2009年から12年まで中断となっており、その廃止の懸念もありましたが、福嶋教輝前在サンパウロ総領事の奔走によって再開しました。福嶋前総

領事に心から感謝申し上げる次第です。

日本・ブラジル外交関係樹立 120周年の節目において

両国間の修好通商条約が結ばれて、それに則って間もなく日本人のブラジル移住が始まり、次第に海外で最大の日系人コミュニティが形成されました。条約締結から120年経ったいま、顧みると日系人は当国の行政、立法、司法、教育、学術、技術、企業等あらゆる分野で指導的な地位を占めるに至っています。その流れの中で外務省研修制度も50年にわたり、人数は少ないとしても相当な影響力のある日本人子弟の発展に寄与してきたといえます。しかもその皆が日本社会の諸側面に触れて日本に対する理解を深め、ブラジルのため、また両国間の親善に貢献していることは、当該研修制度の成果を物語るものであります。

外務省研修生

ブラジルOB会の結成

1972年に、当時在サンパウロ日本国総領事館文化担当の鈴木康之領事の提案で、研修生のOB会が誕生しました。法人登録はせず、ブラジル各地の元研修生の横のつながりを固めるとともに、次回研

修生候補の推薦をして在サンパウロ総領事館の人選作業に協力する活動を行うことになりました。

元研修生たちがそれぞれの職業、その他の分野で活躍しているので、OB会として事業を興す必要はないと認識しておりますが、横のつながりを強化する意味で全国または中南米の元研修生会議を企てるに至り、95年にペルーのリマ市で第1回国際会議を開催しました。それ以来、2014年のボリビア会議を最終として14回の国際会議を行ってきましたが、その何れにもブラジルOB会が率先してテーマの組み合わせ等を含め実現に積極的に参加してきました。そのほか、全国会議を4回行っていきます。その活動の関係で96年に法人としての登録をしました。

今後の課題は、今までの関係に基づいて中南米諸国の元研修生と連携して日本と中南米との友好関係の緊密化を図る各事業に協力することでしょう。

研修制度 50 周年の記念

記念事業としては、第一に研修制度の成果を評価するための調査で、その方法としてはOBたちに呼びかけて、法学、工学、保安、政治、医療、福祉、その他と、7分野に分けて夫々の活動状況を報

告してもらい、それによって研修事業の有効性を反映させる企画がありました。時間の制約で報告収集、執筆、翻訳等の作業が十分ではなかったものの、報告をまとめて記念誌を編纂しました。

第1回研修生の渡部和夫氏は、同誌において制度の総合評価をするにあたり、次のように述べています。

「多忙な作業でしたが、どうにか外務省研修生のデータや感想などを収集することが出来ました。確かに広大なブラジル国内の各州や各市で活躍している元研修生を見つけ出すのは大変でした。初期の研修生の中にはすでに亡くなっていた方もいましたが、親戚の方や友人から情報を頂きました。お陰で長年接触がなかった仲間と再会できる機会にも恵まれました。

私達外務省研修生50周年記念実行委員会は3ヶ月にも及ばない短期間に評価報告書を企画して実行することになり、同時に本書も発行するに至りましたが、委員をはじめ一般会員やボランティアの方々の努力によって完成することができました。

内容は各研修生から日本での研修経験と評価を聞きだして編纂するのが目的でしたが、様々な分野で活動されているので、主職業をベースに研修エリアを分類し、法学、エンジニア、治安、政治、福祉、医療、その他としました。各分野に担当者を指名し元研修生に呼びかけました。

その結果は思ったより良く、200人の元研修生のうち、50%以上の方のデータを収集することが出来ました。この日本語版には残念ながら間に合わずそのまま発表することにしましたが、後日発刊する

ポルトガル語版ではもっと多くのデータと完璧な内容を備えたものにしたいと考えています。

当記念誌のデータを読む前に外務省研修生OBの本田イズム氏と桑原エジソン氏が書いた『外務省研修生50年の展開 -人々と諸国』を一読されることをお願いします。それにはブラジルの研修生の50年にわたる活動の国内外の背景が詳しく描かれていると思います。

今まで集めた情報だけでも、確実に外務省研修制度の大きな意義が理解できます。各研修員自身のためばかりでなく、日本の文化や伝統をブラジルにおいて広め、日本とブラジルや中南米諸国との関係に於ける研修生の様々な活躍が見られます。

元研修生の皆様は自分の両親や祖父が伝えてくれた文化を、日本において直接体験したことによって、日本をもっと敬うようになったそうです。特に日本の規律と経営は印象的な思い出であったと語っています。日本から帰国した後、ブラジルの現実を見直し、もっと日本の倫理を伝える努力をしようとする方も数多く見られました。

研修生の中には日本での経験をすぐに自分の職業に適用された方もいます。日本で知った新しい機械、新技術、以前からあった物の新しい使用法や様々な機能をブラジルで実行し成功した人も大勢います。日本の警察の交番や地域警備などもブラジルでそれを応用し実施しています。裁判に関する分野では、日本の和解方法制度の考え方がブラジルの司法制度にも影響を与えました。

さらに重要なのは日本と日本人への理解、そして日本人の文化、倫理と日系である誇りを研修生が

ブラジルで広める活動なのです。各職業における他、ボランティア活動としても日本とブラジルの関係を深める努力をしています。

このような事実に基づき、外務省研修制度は単に継続されるだけではなく、さらに研修生の数を増やして、研修期間ももう少し延ばしていただくことを望んで、外務省をはじめ各関係者に対して感謝申し上げる次第であります。」

記念事業の第二として、2015年4月10日に記念式典を行いました。式典において、一時中止となっていた制度の再開に尽力された福嶋総領事の表彰並びに研修生の分野別活動に関する報告がありました。

記念訪日

また、記念事業の一環として、外務省の関係者を表敬して報告を行う目的で中南米諸国の元研修生に呼びかけて、訪日団を構成しました。団員は15名（うち、ペルー代表1名）で、2015年5月に東京で集合しました。

外務省の特別支援をいただき、5月20日に外務省を訪問して、宇都外務大臣政務官に丁寧なお言葉をいただき、報告書としての記念誌を贈呈させていただき、翌日の21日には、首相官邸で世耕官房副長官を表敬し、その際に記念誌の贈呈を行いました。同5月21日午後6時に、ラテンアメリカ協会の主催によるラウンドテーブルに出席しました。日本側参加者は、ラテンアメリカ協会、日本ブラジル中央協会、海外日系人協会の幹部の方々に、外務省から服部中南米局南米課事務官でした。ラテンアメリカ協会の堀坂常務理事の司会で有意義な意見交換が行われました。受け入れてくださった機関

及び団体の方々のご厚意に心から感謝する次第であります。

結論

結論として、中南米諸国の日系人が日本文化の価値観を持ち続け、それぞれの国の発展に寄与するとともに、日本との友好関係をますます緊密にする使命を意識す

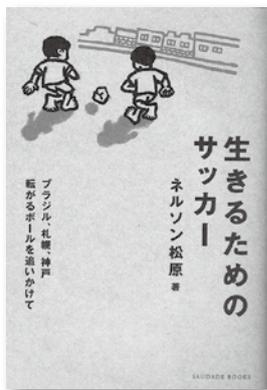
ることが望ましいのは言うまでもありませんが、その指導的人材を育成するためには日本との人的交流、とりわけ各研修制度を強化する必要がありますといえます。

外務省研修生ブラジル OB 会としては、この制度の価値を高く評価し、今までの研修事業をありがたく感謝するとともに、今後も若

い指導者の育成のためにその拡大及び強化を切に願うものであります。

(記事作成担当者—本田 イズム、
外塚 ジョルジェ、岩水 マリオ、大原 ツヨシ)

ラテンアメリカ参考図書案内



『生きるためのサッカー ブラジル、札幌、神戸 転がるボールを追いかけて』

ネルソン松原 松本 創 (取材・構成)・小笠原博毅 (取材・解説) サウダージ・ブックス
2014年6月 239頁 1,800円+税 ISBN978-4-907473-04-4

北海道江別から父の代にブラジルへ移民して生まれた二世の著者は、大のサッカー好きだったが母からはプロの道へ進むことを禁じられ、体育大学へ進学し保健所・銀行で働きながら勉学とサッカーに励んでいた。札幌大学が日系人サッカー留学生を募集していること知り応募、大学を休学して日本へ向かう。2年間の留学期間中、札幌大学のサッカーにブラジルスタイルを持ち込み、子供たちに当時は未だ無かったフットサルを教え、その競技規則の日本語訳にも加わった。社会人チームからの誘いを断り、ブラジルの大学に復学、卒業し保健所の同僚の日系人と結婚してスイミングスクールの共同経営者になったが、再び札幌大学の恩師から少年サッカーのコーチにと誘われて北海道へ。以後札幌一高のコーチ、神戸に移って川崎製鉄サッカー部のコーチ兼ブラジル人選手の通訳をしていたが、阪神淡路大震災に遭遇。ヴィッセル神戸のユースチームでのコーチ、監督の後、FC神戸のコーチを経て再びヴィッセル神戸に呼び戻され男女の大人相手にサッカー普及を目指すスクールの仕事や通訳を務めた。2010年に神戸スポーツアカデミーの立ち上げに加わり、大人のサッカー教室とフットサル普及を、また夫人とともに関西ブラジル人コミュニティというNPOを拠点にブラジル人子弟の支援活動を行っている。

日系ブラジル人の目でみた日本人との社会・文化の差違、両国のサッカーの戦術や発想の違い、日本からブラジルへのサッカー留学生の実態、日本で日系人が暮らし、教育を受けることの苦勞、自身が経験したサッカークラブ運営や若手選手の育て方の違和感などを随所で率直に語っており、単なるサッカー大好きな日系ブラジル人の半生記に終わっていない。

[桜井 敏浩]